
明日があるさ

奈森さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日があるさ

【Nコード】

N99360

【作者名】

奈森さくら

【あらすじ】

「明日があるさ」の歌詞を元に短いお話を作ります。基本的には志保（哀）ちゃんの一人称です。

いつもの駅でいつも会う

私が通学に使う米花駅。私が乗車する電車が来る一時間前には、私は毎朝その駅に居る。

なぜ、そんなに早く来るのかって？

会いたい人がいるからよ

何時も、遠くから見てるだけだけど

私はその人に会う為にわざわざ一時間早く駅に来るの

初めて見た時から私の心はその人に奪われたわ。いわゆる一目惚れってやつかしら

年は私と同じくらい。どこの高校かはわからないけど、何時も青色

の制服を着ている。

会話もした事がない人に、こんなに心惹かれるなんて

私、馬鹿みたいね

その人に会う為に一時間早く駅に来るようになって二週間。最近、その人は駅に来なくなった。

最初は風邪でもひいたのかと思ったけど、それからその人の姿を見た事はない。

もしかしたら転校しちゃって、もうこの町にはいないのかもしれない。

もう、早く駅に行くのはやめようか

そう何度もあった。

明日から来るのを辞めよう

何度そう決心しても

私の足は、その人に会う為にまた一時間早く駅に向かう

そして、また今日も

その人は姿を見せなかった

「……今日も、待ちぼうけか」

それでもきつと私は明日も

一時間早く駅に来る

「……明日があるわ」

そう、心に言い聞かせて

濡れてるあの子コウモリへ（前書き）

コウモリとは、蝙蝠傘（洋傘の一種）の事だそうです

濡れてるあの子ユウモリへ

激しく雨が降る中、私は買い物を終えて自宅へ戻ろうとしていた。

私が愛用していた傘が先日使い物にならなくなって、今は家にたま
たまあった蝙蝠傘をさしている。

傘をさしても、あんまり意味がないぐらい激しく降る雨。私も帰
りを急ごうと少し早足になる。その時だった

「……あっ」

少し先にある店の軒下で髪を濡らし、雨宿りをしている私の片想い
の人を見つけた。

同じ高校に通う一つ年下の彼とは、サッカー部で知り合った。私が
マネージャーをつとめるサッカー部にまるで彗星の如く現れた彼は、
高校生とは思えない天才的なプレーでたちまちチームを全国大会出
場に導いた。

彼が懸命にボールを追いかけて、ゴールネットにボールを入れた時の
あの子供の様な無邪気な笑顔。私は、あっという間に彼の虜になっ
た。

気がつけば、早く帰ろうとしていた私の足はぴたりと動きを止め、私は彼を見ていた。片手にサッカーボールを持ってるところをみると、どうやら練習していたみたい。

天才の影には努力あり、ますます虜になりそう……。

向こうは私に気づいてない。この分だとこちらから何かアクションを起こさない限り彼は私には気づかないだろう。

声かけようかしら

傘、入る？って

でも、素っ気なくされたりしたら

でも、もし成功すれば彼との距離はきつと縮まる。

なかなか声をかける決心がつかない

そうこうしてたら雨が小降りになってきた。それを待っていたかの様に彼は軒下から飛び出し、何処かへ走りさっていった。

結局、私はただ黙って見てただけ

私はゆっくりと再び歩き出した

「……明日があるわよ」

勇気がない自分に、そう言い聞かせた。

今日こそはと待ち受けて

私の初恋の人、その人は学年一の人気者だった。

小学校三年の私はこの春、同じクラスになったある少年に恋をした。勉強が出来て、スポーツも出来て、誰にでも優しい少年は同学年の女子の人気者のになっている。私も、その一人だ。

だけど、同じクラスになって早三ヶ月、少年と会話を交わした事といえど少年が落とした鉛筆を私が拾った時に「ありがとう」と言われたぐらいで、ちゃんとした会話も成立していない。女子の中には、積極的に少年にアプローチをかける子もいるみたいだけど、私はそんな事出来ない。

恋愛に関して、自分がこれほど億劫な人間だとは全く気がつかなかった。

でもやっぱり、彼に少しでも近づきたい。教室で話しかけようかと思っただけ、彼の周りには何時も他の女子がいて、私が入る隙はない。

だったら、下校の時に話しかけよう。確か彼の家は私と同じ米花町、方向は同じな筈。

「今日こそは、彼と……………」

私は校門近くで彼が来るのを待った。

これって、かなり悪趣味よね。いくら話しかけたいからって下校途中の後をつけるなんて。

彼の周りには数人の男子。おそらく友達だろう。まだ話しかけられない、彼が一人になるまで待つ。

私が思っていたよりずっと早く、彼は一人になった。彼の家は米花町五丁目、途中で方向は変わるけど、そこまでまだ大分距離はある。

チャンスだ

少しずつ、彼との距離を詰めていく。

ほら、呼ぶのよ私

話し掛けるの

一緒に帰ろって、言うの。そしたら彼だって、私の事を気にかけてくれるかもしれない。

だけど、行こうとすると心が躊躇してしまう。

あつ、あの曲がり角で彼とは別方向になるわ。

どうしよう

どうしよう

「……………今日は、辞めよう」

彼は、曲がり角を曲がって私の視界から消えた。

「……………明日があるわ」

明日また、挑戦しよう。だけど何回も続ける訳にはいかないわね。

思い切ってダイヤルを（前書き）

現代風にするため、ダイヤル式の電話は止めました。少しサブタイトルとも違いますが、ご了承ください

思い切ってダイヤルを

四つ折りにしてあった小さな正方形の紙には、男らしく雑な字で十桁の数字が並び書かれていた。数字の間には所々横線が入り、二桁・四桁・四桁といった具合に数字を離している。

そう、これは私の憧れの人の電話番号。

ついこの間、サッカー部の部長になった彼からマネージャーの私に「色々、連絡しなきゃいけない事もあるかもしれないから」と自宅の電話番号を書いた紙を渡された。聞くと、彼は携帯電話というのを持ち合わせていないらしい。今時の若者にしては、かなり変わっていると思う。

そんな事より、片想いの人の自宅の電話番号を手に入れた私の気持ちの高ぶりはそれはそれは尋常なものじゃなく、我ながら恥ずかしくなる程、嬉々揚々としていた。

「……電話、してみようかしら」

しかし、これといって彼に話す用事も無い。用も無いのに電話するなんて、変な奴だとか思われないかしら。

そんな時、私はふとある事を思い出した。実は今日、サッカー部の練習中に彼が怪我をしたのだ。そのまま彼は病院に行ったのだが、その後の容態を聞いていない。マネージャーとして、選手の健康状態に目をむけるのは当然の事だ。来月には大会も始まるのだから、もし試合に出られないなんて事になるとチームにも悪影響を及ぼしかねない。

「……確認しないといけないわ」

彼の怪我の具合を聞くために電話をするんだ、決して彼と電話で話したいだけなどという不純な動機ではないと自分に強く言い聞かせ、私は電話のそばに寄った。

一つ一つ、間違いのない様に数字を確認しながら、私は彼の自宅の電話番号を押してゆく。

受話器を耳に当て、全ての番号を入力しおえると、耳に呼び出し音が聞こえてきた。

ブルルル

段々と心臓が早くなってるのがわかる。

プルルル

声が裏返ったりしないように、何度か咳払いをする。

プルルル

早く出ないかな

もうすぐ、電話口から彼の声が聞ける筈。

そう思うと緊張がより増した。

プルルル

やばい、どうしよう

プルルル

こんなんじゃ、まともに話せない

プルル……

「……………はあ」

結局、私は彼が出るのを待てなかった。

「……………明日、またかけてみよう」

別に、これが最後じゃないんだから

「……明日があるわ」

そう言って私は、彼の自宅の電話番号を携帯電話にメモリー登録した。

初めて行った喫茶店

「結構、いいところだろ？」

そう言って私に微笑みかける彼。初めて二人で出掛けた先は彼行きつけの喫茶店だった。

まあ、恋人同士でもない訳だから、あんまり期待するのもしかた思っけど。

実は、私高校生にして喫茶店というところに来るのは初めてで、なんか新鮮な感じがしていた。店長のおじさんとは随分親しいみたいで、私にだけ注文を聞いてきた。どうやら彼のは聞かなくても、わかってるみたい。

今日私達がここに来たのは、私が彼に大事な話をしたいから誰にも邪魔されないような所で会いたいと言ったところ、彼がこの喫茶店を紹介してくれたのが始まり。

そして大事な話というのは

私の気持ちを彼に伝える事

つまり告白。今日私は彼に告白するつもり。もうすぐ卒業だし、卒業すればしばらく会えなくなるかもしれない。

あの時、告白しておけば良かった、なんて後悔するのは嫌だから、今日告白する事を決めた。

結果は恐れない。

まあ、振られたら泣くかもしれないけど

だけど、私は今日彼に言う。

あなたが好きです。と

「でさ、その時あいつが」

彼の他愛ない話を聞いていると、もし告白して振られたらもうこんな風に話す事は出来ないかもしれないという不安が頭の中をよぎった。

その不安は私の中に強く根付いてしまったみたい。

でも、今日言うって決めたんだから

そう自分を奮い立たせた。

「ねえ、話があるの」

「あつ、そうだったな。悪い、俺ばっか話しちまって」

私はゴクリと息をのんだ。

「……あのね、私」

ドキドキする。頬もどんどん紅潮するのがわかる。

「………私ね」

もう喉のところまで来てる。

もうすぐ

もうすぐよ

ここまで出たなら言える

でも、やっぱり私の心は弱いまま

「……………ごめんなさい。やっぱりいいわ」

とうとう言えなかった私

ここまで出たのに

言えなかった

私の意気地なし

「……明日があるわ」

きつと、いつか彼に伝える。私はそう誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9936o/>

明日があるさ

2010年11月24日15時33分発行